

陳舜臣さんを語る会通信

NO.36

May 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」 編集委員

発行日 2021年5月1日

玄奘の旅、及び『西遊記』をもとネタにして、ご自身の旅行や史話を語る『新西遊記』

『新西遊記』を取り上げます。初出は『週刊読売』1974年1月5日号～75年1月4日号。（編集委員 橋雄三）

①『新西遊記』取材旅行 初めての新疆

一九七三年、河西回廊を通って新疆まで、陳舜臣さん念願の旅が実現しました。

陳舜臣 八月から九月にかけてです。もつと早めに行くつもりだったんですけどね、北京で足止めになっちゃったんです。あらへ行く許可が、なかなか出ないんですよ。当時、知り合いの廖承志さんが中日友好協会の会長でして、その口ききで秘書だった孫平化さんが動いてくれたんです。で、トルファンまでね……。

稲畑耕一郎 それで『新西遊記』もトルファンまでで、火焰山のことは書かれていないけど、その先のことはない。

陳 ええ、ここまで来ることができたんだから……、という一種の自足みたいなものがありました。それに、その先も、いつかは行けると思っていましたから。

（中略）

トルファンは盆地で、海拔マイナス百四十メートル、世界第二の低い土地なんです。車で行くといくぶん、すり鉢の底に下りていく感じです。火焰山というのは、ボグド・オラ山塊がこの盆地の北辺に張り出して、その南端の山なみでしてね。

稲畑 一木一草もない赤い山肌に浸蝕のあとが、無数の縦じわのように並んでいますね。酷暑の中でかげろうでも燃えている、たしかにゆらめく焰のように見えます。

陳 『西遊記』では、山の周囲八百里が火の海で、三蔵法師一行はどうしても通ることができないことになっています。そこで孫悟空が登場します。唯一、その火を消せる芭蕉扇をめぐって、持ち主の女妖怪、鉄扇公主との大立ち回りの始まりです。京劇の「西遊記」の中でも、見せ場の一つとなっているんですよ。

私はなん度もトルファン盆地を訪れましたが、最初るときは八月末でした。毎日、四十度を超えるたいへんな暑さでね、五十度近くになった日もありましたよ。



②吳承恩『西遊記』以前に民間伝承があった

陳 玄奘三蔵の大旅行は、今日の私たちの想像を絶する困難さでした。でも、弟子たちに口述した『大慈恩寺三蔵法師伝』では、旅の苦勞を、ただ淡々と述べているだけ。玄奘自身があらわした『大唐西域記』では、自分のことには触れていません。彼が見聞した西域各国の地誌です。

そんなことから、人びとが彼の艱難辛苦の旅を思いやり、いろいろな物語を作って後世に伝えようとしたのだと思います。『西遊記』は、そんななかで成立したものでしょう。

稲畑 実際の玄奘は、大秀才であると同時に、実にタフなんですね。しかし、『西遊記』の玄奘さんは、ほんとうに情けない。女にはたぶらかされるのは、化けものが出てきたら逃げ回るはでね。

陳 トップがあまり強いと、人民は苦勞するんです。トップは決断なんかせずに、おろおろしているほうがいい。そんな人民の願望が、吳承恩の小説にも出ています。

（中略）

『西遊記』というのは、吳承恩で成立したもののじゃないんです。

その前の元の時代に、『唐三蔵西遊記』という本があったことがわかっています。おそらく、講談を筆記したものでしょう。

陳さんは以上のように語っておられます。『西遊記』は吳承恩の創作ではなく、それ以前から民間伝承としてあった話なんだろうね。



ところで、『新西遊記』では、『西遊記』について語るときは「三蔵」と呼び、史実に従うときは「玄奘」と、使い分けられています。

文章は集英社「陳舜臣中国ライブラリー25」『自作の周辺』の対談から

■ 画像は講談社文庫版表紙

『新西遊記』は小説というよりエッセー

『新西遊記』は、『西遊記』の記述、『大唐西域記』ほか玄奘の旅、陳舜臣さんご自身の旅行及び史話・蘊蓄を織り成したエッセーです。

そう思える箇所をいくつか挙げましょう。

①『西遊記』の水簾洞の猿の話が語られていたかと思うと、猿の肉は「どうしようもなくまずい」、いや「じつにおいしい」とか、猩々(オランウータン系の猿)の唇の部分が「この世の食べもののなかで最上」だとか、『西遊記』の内容から外れ、陳さんの蘊蓄が披露されます。そして、そのあと、「猿



の肉から猩々の唇まで話はとんだが、……」と一言断って、また、『西遊記』に戻っていきます。

②こんな箇所があります。

孫悟空は西王母が『瑤池』のほとりの邸でひらく宴会に、自分が招待されていないと知って立腹、会が始まる前に宴会場に忍び込み、ご馳走を食べ酒を飲み、会場を荒らしてしまいます。

陳さんは、このくだりに、自身の新疆『天池』(『瑤池』の現在の通名)への旅の記述を挟みます。

③また、こんな箇所もあります。

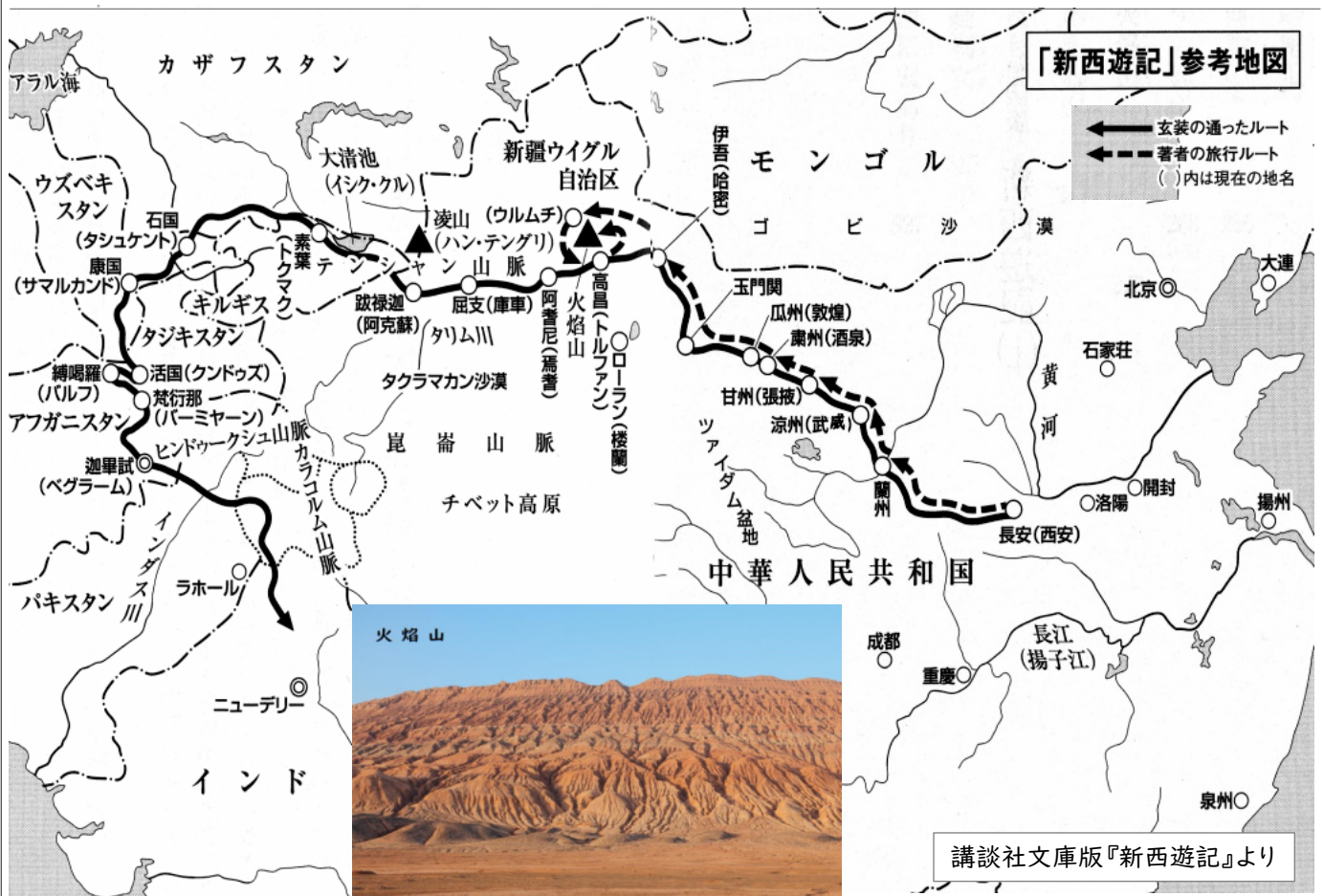
乱暴狼藉をはたらく悟空は、釈迦如来によって五行山に閉じ込められてしまいます。

このくだり、陳さんは、五行山は、現在の太行山脈であるとし、清末の龔自珍の「太行山脈はのたうつように走り……」という詩を取りあげ、アヘン戦争前夜の清朝に触れます。

つまり、『西遊記』が語られ、その話に関連し、陳さんの旅行が語られ、中国の歴史が語られ、その他、陳さんの蘊蓄が語られ、その話が終わると、「話はそれでしたが、……」とか「話は孫悟空に戻るが、……」と言って、また、『西遊記』の話が続くのです。最後までこんな調子です。

その他、『大唐西域記』『三蔵法師伝』などに拠る玄奘の旅と『西遊記』の記述との比較、差異も随所に入ります。あっちへ飛び、こっちへ戻り、読んでいて、頭が混乱しそうになる箇所も。それが『新西遊記』です。小説というよりエッセーといえます。

■左の写真は水簾洞の猿です。リュックからカメラを取り出そうとすると、餌をもらえると勘違いして、5匹も6匹も近づき、リュックに手をかけます。



三蔵法師と陳舜臣さんは祖先が同じ ルーツは中原、^{えいせん}潁川のほとり

集英社『陳舜臣中国ライブラリー25』
「天竺への道」より引用します。

玄奘の俗姓は陳である。名は^い禪と
いった。
^{ちんりゅう}陳留の人であるが、^{こうし}緱氏で生まれ
たという。

陳留県は隋では梁郡に属し、唐では
汴州に属した。現在の開封市のすぐ
ぐ東南にあたる。『玄奘法師行状』
という本には潁川の人としている。

隋代の潁川は郡であり、郡治(郡の役
所の所在地)は陳留県の西南約百キロ
だが、郡域は陳留のすぐそばまでひ
ろがっている。陳姓は潁川のほとり
が発祥の地とされているから、右の
書物の著者である^{めいしやう}冥詳は、とうぜん
のことのように潁川の人と書いたの
であろう。(中略)

『大慈恩寺三蔵法師伝』には、
—— 漢の太丘の長仲弓の後。
—— としている。

後漢の太丘県の県長をしていた
陳寔(一〇四年―一八七年)、あざな
仲弓の子孫であるというのだ。陳と
いうのは、中国でも大きな姓で、い
くつもの派があり、そのなかに陳寔
の後裔という一派もある。じつは私
の家も、陳寔を祖とすると称してい
る。おそらく現在、何百万もの陳姓
の人が、陳寔派を称しているのでは
あるまいか。(p. 476)

県長という、さほど高くない地位
にもかかわらず、陳寔は、清貧・徳
義の人で、その名を知らない者はい
なかった。

陳寔が死んだとき、各地から弔い
に赴く者三万余人をかぞえた。高官
顯職の人ではなかったが、多くの人
に親しまれ、敬愛されていた人物で
ある。

子供のころ、私はよく父や祖父か
ら、ご先祖陳寔の話を書いた。ご先
祖といっても、千七、八百年も前の
ことときくと、まるで別世界の話の
ような気がした。(p. 477)

玄奘三蔵



陳さん父娘(一九七九年パミール高原)
講談社陳舜臣全集第七巻より

平成三年建立、薬師寺玄奘三蔵院 玄奘の霊骨を安置

平成三年、
奈良の薬師寺
に玄奘三蔵院
が建立されま
した。このこ
とに関連し、
集英社『陳舜
臣中国ライブ
ラリー25』
「三蔵法師」
より引用しま
す。なお、画
像は薬師寺HP
からの転載です。

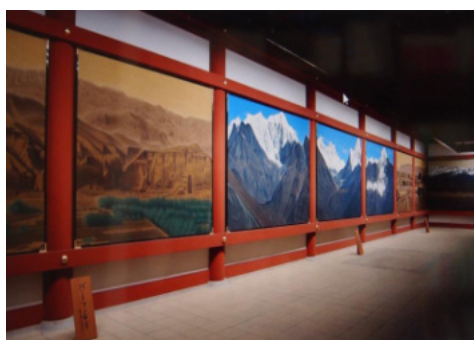


京駐留の日本軍が整
地をしているとき、
石棺を発見し、棺名
によって玄奘三蔵の
頂骨の一部であると
判明した。高森部隊
長はそれを中国側に
引き渡し、一九四四
年、南京玄武山に建
塔納骨がおこなわれ
た。そのとき招かれ
た日本仏教連合会
の人、中国側はあら
じめ分骨された霊骨を贈
ったのである。

六六四年陰暦二月五日に、
三蔵法師玄奘は円寂した。遺
言によって、体はいるだけ
の棺がつくられ、アンペラの
輿^{こし}によつてはこばれ、長安南
郊の白鹿原に葬られた。(中
略)五年後、勅命によつて、
長安南郊樊川の北原に改葬さ
れた。

九世紀末の、黄巢の乱によつ
て、玄奘の葬られた場所に建
立された興教寺の塔も被害を
受けたが、演化大師の可政と
いう人が、頂骨の一部を南京
郊外の天禧寺に塔を建てて安
置した。明初に改葬されたが、
その後、所在もわからなくな
ってしまったという。

ところが、一九四二年、南



平山郁夫筆 大唐西域壁画

日本に分骨された霊骨は、
東京芝の増上寺に安置され
たが、空襲を避けて埼玉県岩槻
市の慈恩寺に預けられた。
(中略)さらに、この寺から奈
良薬師寺と台湾日月潭玄奘寺
に分骨された。(p. 667-668)

ごしょうおん
呉承恩(1500頃-1582頃)・『西遊記』・花果山

《1. 花果山は江蘇省連雲港市にある山》

孫悟空は、北京オリンピックのマスコットに、“福娃”と最後まで競って、破れはしたが、中国の人々に最も親しまれたキャラクターの一つであることに違いはない。その孫悟空の生まれた山、花果山は、連雲港市街地の外れ、私が勤務する大学からバスで15分ほどのところにあった。

また、市街地のいたるところで、その銅像、レリーフ、看板などを目にし、孫悟空が市民にとって非常に身近な存在になっていることがわかる。右の写真は、近くの公園にあった孫悟空の銅像。

《2. 2006年正月、花果山に登る》

ところで、『西遊記』では、孫悟空は花果山の山頂にあった仙石から生じた石卵が孵かえって生まれたことになっている。

私は、連雲港で生活するようになって、ずっと、花果山へ行って見たいと思っていた。帰国を間近に控えた冬の日、教え子の案内で、やっと、花

果山登山が実現した。画像はその時のものである。

写真①、花果山の標識の後ろ、ちょっと見にくい、上から孫悟空がのぞいている山門が写っている。この山門を入ったところに、写真②、呉承恩の像がある。呉承恩は『西遊記』の作者といわれているが、あくまで、「いわれている」であって、むしろ研究者は、『西遊記』を呉承恩の創作とすることに否定的である。また、花果山も、連雲港以外、例えば洛陽にもあるそう。

降雪の翌日で、中腹からは、すばらしい雪景色の登山だった。

花果山には、写真③、海寧禪寺という立派なお寺がある。この境内を抜けると、孫悟空の棲家だったという写真④、「水簾洞」だ。

この日は気温が低く、洞窟前に氷のカーテンができていた。付近に、たくさん猿がいて、油断すると持ち物に手をかける。ここを通り過ぎ、雪道を半時間も登ると山頂「玉女峰」(625m)に着く。

《3. 江蘇省淮安にある呉承恩故居》

連雲港から高速バスで南へ2時間ほどの所に淮安という大きな都市がある。淮安出身の著名人といえば、まず、周恩来の名があがる。ここに、明代の文学者、写真⑤、呉承恩の故居がある。



この頁の画像は全て編集委員撮影